

古代イラン青銅製柄孔付斧の編年試案

足立拓朗

Tentative Chronology of Ancient Iranian Bronze Shaft-hole Axe-heads

Takuro ADACHI

斧 (Axe) は一般的な利器の一つであり、西アジアにおいても様々な用途に使用してきた。本稿では古代イランの青銅製斧の編年について考察を行う。西部イランのルリストーン地方では墓地遺跡などから、大量の副葬品が発見されており、青銅製斧は特徴的な出土品である。中近東文化センターではルリストーン地方から出土した各種の青銅製斧を収蔵している。それらの資料を分析し、前3千年紀後半から前1千年紀前半の古代イランを中心とした西アジアの斧の編年を再検討する。分析の中心となるのは、青銅製斧の中でも最も一般的な柄孔 (Shaft-hole) 付斧である。柄孔付斧を5つの系統に分類し、それらの出自関係を分析する。そして最終的な類型を抽出し、その機能を考察した。最終類型の斧は武器としての用途も想定されているが、刃部の向きや構造、その装飾性から祭器として用いられた可能性が強いことを指摘した。

キーワード：斧、ルリストーン、青銅、柄孔、古代イラン

The axe is a typical tool, and has been used for a wide variety of purposes in West Asia. A tentative chronology of ancient Iranian Bronze axes is considered in this paper. Many bronze artifacts were found in ancient graveyards in the Luristan region, located in the western part of Iran. Shaft-hole axe-heads were a typical kind of artifact. The Middle Eastern Culture Center in Japan stores some bronze axe-heads from Luristan. The bronze axe-heads were analyzed to reconsider the chronology of axe-heads in ancient West Asia from the 3rd millennium B.C. to the early half of the 1st millennium B.C. After reconsidering the axe-head chronology, this paper shows five lineages of bronze axe-heads in West Asia and the latest type of the lineages. It has been sometimes considered that the latest type were used weapons, however the cutting-edge direction and the decoration suggests that they were utilized as a cult tool.

Key-words: axe, Luristan, bronze, shaft-hole, Ancient Iran

はじめに

日本国内に所蔵される西アジアの先史・古代工芸品の中で、最も数量が多いのはイランのものであろう。1979年のイスラーム革命以前にイランを訪れる日本人が多くたことがその原因の一つであり、また古代イランの美術・工芸品が美術的・技術的に優れていたのもその原因であろう。

イランの古代工芸品の中で魅力的だったものの一つにルリストーン青銅器があり、岡山市立オリエント美術館、古代オリエント博物館、中近東文化センター、天理大学附属天理参考館などに相当数の資料が所蔵されている。

本稿では中近東文化センター所蔵のルリストーン青銅器の中で特に柄孔付斧に焦点を絞り、先行研究に沿いながら資料の編年的な位置づけを行う。その際、ルリストーン地方にとどまらずメソポタミア、シリアとの比較を試み、現行の年代観の整理を行ない、古代イランの青銅製斧の特徴

を論じる。その後、青銅製斧としての最終類型を抽出し、その機能について分析し、青銅器時代から鉄器時代の移行期の金属の役割の変化について考察する。

本稿の扱う年代は前3千年期後半から前1千年紀前半である。銅石器時代～青銅器時代前期前半、またアケメネス朝以降は扱わない。

西アジアで斧といえば横斧 (Adze)、縦斧 (Axe) の他に柄の両側に横斧と縦斧が付けられるもの（縦横双刃斧：Axe-adze）¹⁾もある。また横斧や縦斧と同様な形態で系統関係が確実な鶴嘴 (Pic) も存在する。一般に横斧と縦横双刃斧は工具、縦斧と鶴嘴は武器とみなされることが多い。

本稿で扱うルリストーン出土とされる斧は正確には縦斧である。またさらに正確に記述するなら柄孔付縦斧身 (Shaft-hole axe-head)²⁾であろう。ただ、今回は横斧、縦横双刃斧、鶴嘴について触れる余裕はない、また柄まで残

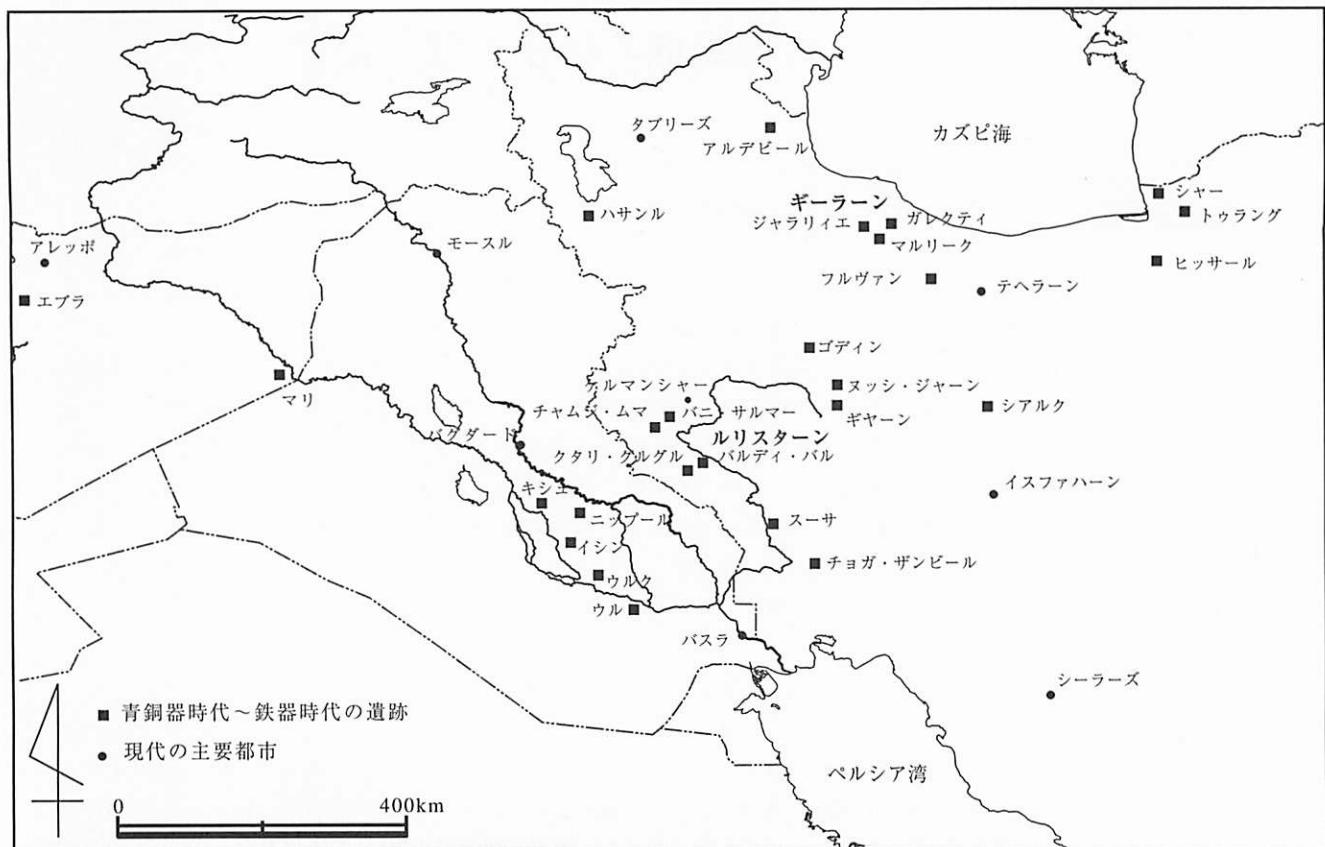


図1 イラン、イラク、シリアの青銅器時代～鉄器時代の遺跡分布図

存しているような完形の斧の資料は存在しないので、斧と表記した場合は柄孔付縦斧身を指すということを明記しておく。

柄孔付縦斧以外の斧も存在しており、本稿で対象とした時代より遡る時期では一般的な形態である。これらの斧の分析は今後の課題したい。

本稿では斧（柄孔付縦斧身）の部位を以下のように表現する（図3-1～3）³⁾。まず斧は刃部（Blade part）と基部（Proximal part）の二部位に分けられる。

刃部は直接対象物に接触する刃先（Cutting edge）と柄と刃先の間で刃部を構成する両刃面（Both side's blade surfaces）・上下刃端（Upper and lower blade ends）で成り立っている。上下刃端は幅狭の面となることもある。刃面には左右両面があるが、使用者から向かって左右を区別する。

基部は柄孔によって刃部と区別される。柄孔周辺のみが基部となる場合もあるし、柄孔背面に付属物がつけられる場合もある。また柄孔が下へ伸び、管状を呈する場合があり、本稿ではこれを「管状柄孔（Tube-shaped shaft-hole）」と表現して区別する。この管状柄孔の有無が本稿分類の大きな基準となる。

西アジアの青銅製斧の研究

本稿で取りあげる柄孔付斧については、1930年に既にR.ドュソ（Dussaud）によって研究が開始されている。彼はルリストーンの青銅製斧を中心としながらもパレスティナ、シリア、アナトリアの資料を加え、基部背面に鉢状の突起を有する斧がパレスティナで出土していることや、アッカドのナラムシン王の戦勝碑文に表現されている斧との比較等、様々な指摘を行った（Dussaud 1930）。

総括的な斧の集成と分類は、J. ドゥシャイエ（Deshayes）によって行われた（1960）。この研究では西アジアからバルカン半島東部に至る213点の柄孔付斧を図示し、15型式に分類している。ほぼ全ての形態の柄孔付斧を網羅しており、まさに西アジア古代斧研究の基本となっている（図2）⁴⁾。その分類案を紹介すると、A型：管状柄孔を有し、基部と刃部の上端がほぼ同一面となるタイプ、イラン・メソポタミアに分布する（図2-A）、B型：管状柄孔が存在せず、基部上下に抉りがあるタイプ（図2-B）、C型：イラン・メソポタミア・シリアに分布し、刃部が上部にはみ出し、基部と刃部の上部にずれのあるタイプ（図2-C）、D型：ルリストーンに分布する基部背面に鉢状の突起があるタイプ（図2-D）、E型：シリア・パレスティナに分布する基部と刃部の境が明瞭でないタイプ（図2-E）、F

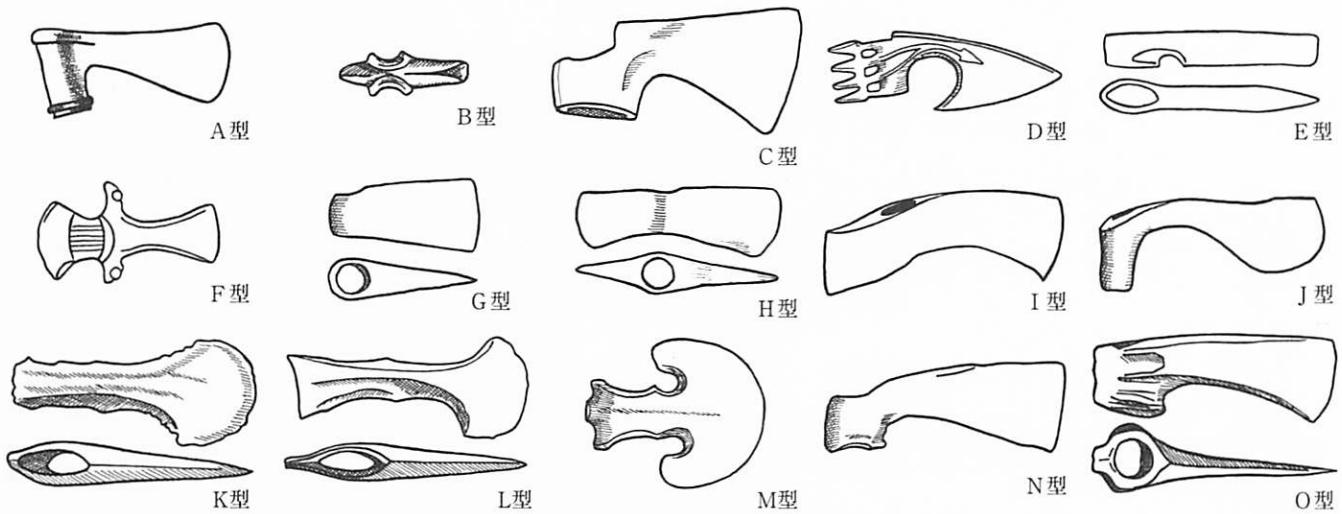


図2 ドゥシャイエの分類案 (Deshayes 1960 から作成) (縮尺不同)

型：シリア・パレスティナに分布する基部と刃部の境が明瞭なタイプ（図2-F）、G型：基部と刃部の上部が同一面を成し、基部背面に丸みを持つタイプ（図2-G）、H型：エーベ海・アナトリアに分布し、基部背面に稜を持つタイプ（図2-H）、I型：コーカサス、ダニューブ川流域に分布し、刃部が下方向に湾曲するタイプ（図2-I）、J型：コーカサス・ダニューブ川流域に分布し、刃部が下方向に湾曲し管状柄孔を持つタイプ（図2-J）、K型：コーカサスに分布し、半円形の刃部を持つタイプ（図2-K）、L型：コーカサス南部に分布し、半円形の刃部を持ち側面に稜を持つタイプ（図2-L）、M型：コーカサス南部に分布し、刃部が半月形を呈するタイプ（図2-M）、N型：ダニューブ川流域に分布し、管状柄孔を有するタイプ（図2-N）、O型：ダニューブ川流域に分布し、基部にひだ状の装飾を持つタイプ（図2-O）、となる。これら型式にはいくつかの亜型式も設定されている。

P.カールメイヤー (Calmeyer) はルリストーンとケルマンシャーから出土したと考えられる青銅器について分析し、73グループに分類した（1969）。このうち、18グループが青銅製斧である⁵⁾。

その後の主な研究としては、アッシュモレアン博物館の資料を中心としたP.R.S.モレイ (Moorey) の研究がある（1971）。彼は28点の資料を図示し、柄孔付斧に対しては装飾のないものが古く、次第に装飾が増し、特に基部背面に鉢状の装飾が付けられるものが新しいことを示唆し、その順番で紹介している。この研究は編年を作成する上で基本的な枠組みとして有効である。

P.アミエ (Amiet) はデイビット＝ウェル (David-well) コレクションを紹介している（1976）。ここでは器種別ではなく年代別に解説を加えており、銘文資料を多く紹介し

ている。

E.D.ワウル (Waele) はゴダール (Godard) コレクションを紹介している（1982）。彼はルリストーン青銅器と並んでイランで盛んに取り引きされていたアムラッッシュ青銅器とルリストーン青銅器を明確に分けて、カタログを作成した。両者の特徴を把握するのに有効である。三日月形の刃部を持つ斧を多く紹介しており、彼はこの三日月形斧をハ (ア) ルバード (Hallebarde) として分類している (Waele 1982: 30-33)。

O.W.マスカラ (Muscarella) はメトロポリタン美術館の資料を検討し（1988）、10点の資料に詳細な解説を付けている。

以上が博物館資料を中心とした研究である。これらの研究はメソポタミア、シリアの出土品との比較により、ある程度の年代を導きだし、かつ銘文資料によってその年代付けを補強している。これらの研究に決定的な影響を与えてきたのが、ベルギーのゲント大学を中心とする調査隊によるルリストーン西部（プシュティ・クーフ）での発掘調査である。

この調査は1965～1979年に15シーズン行われ、銅石器時代から鉄器時代に至る遺跡が調査された。これらの報告は各種の研究雑誌に概報で記されてきたが、近年正式な報告書が刊行され始め、また総括的な研究も提示されている（ハーリング・ウヴェラート 2002）。

日本では大津忠彦がベルギー隊の調査を概観し、斧の形態によって共伴する副葬品が異なることから、時期差が存在することを示唆している（大津 1999）。ルリストーンではスタンダード (Standard) あるいはフィニアル (Finial) と呼ばれるソケット付きの人物装飾や動物装飾が多く見られ、この青銅器文化の特徴とされるが、その編年研究はま

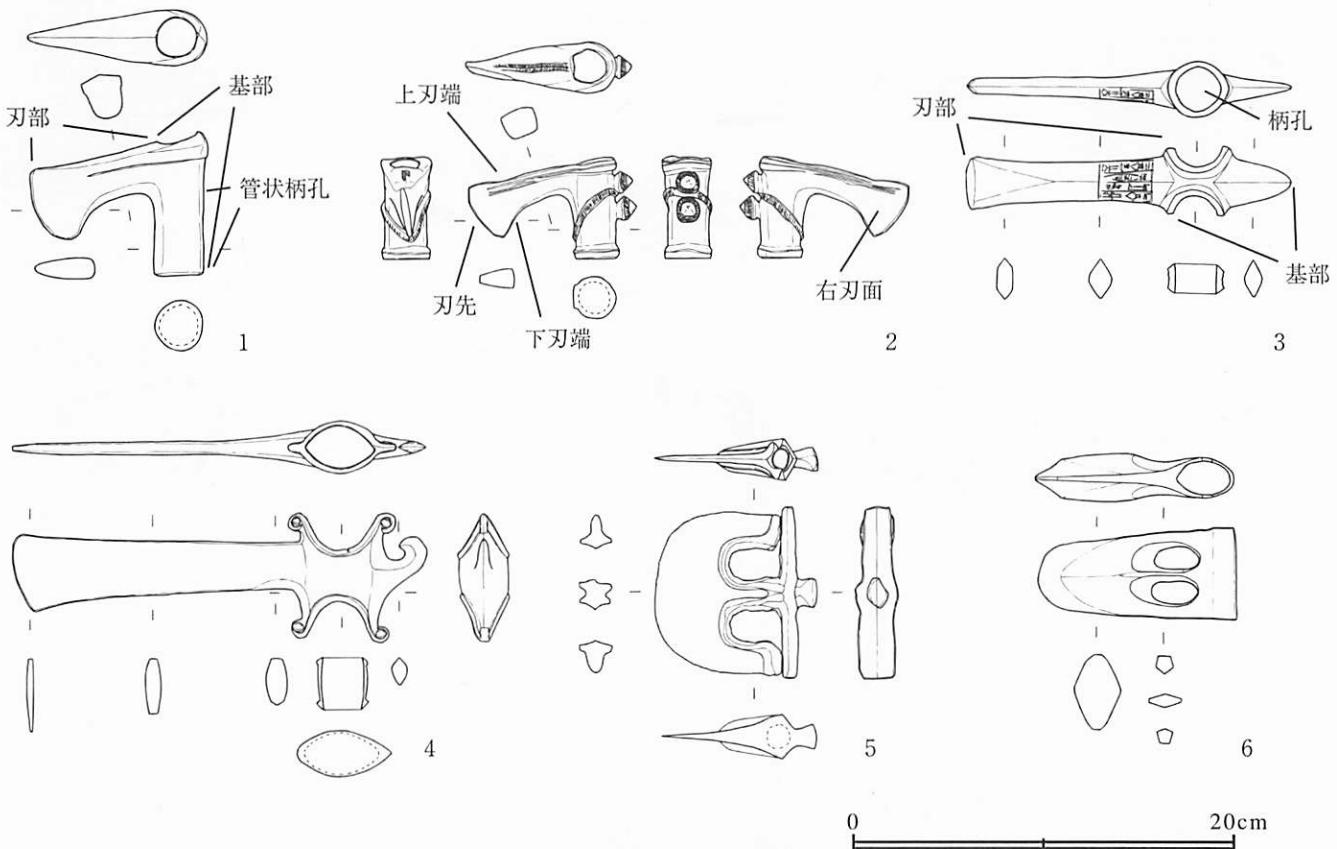


図3 中近東文化センターの青銅製斧

だ整備されているとは言えない。しかしながら他の地域と比較検討が行いやすい斧との供伴関係から手がかりが得られることは多いと考えられ、大津の指摘は傾聴すべきものである。

スタンダードに関しては、山本忠尚がルリストーン青銅器の研究の一環としてこれまでの研究を詳細に紹介し、その編年に考察を加えている（山本 1990）。彼は地域ごとの剣の形態差を明確にするという重要な研究も残している（山本 1982）。古代イランの剣については、紺谷亮一によるバイメタル問題に取り組んだ研究（紺谷 2001; Kontani 2002）や筆者の型式学的研究（Adachi 2002）もある。

中近東文化センター資料の年代付け

ここでは先に挙げた先行研究を参照しつつ、中近東文化センター資料の解説とその帰属年代について検討していく。

図3-1は簡素な形態の斧である。基部は管状柄孔を有し、柄孔断面形は円形である。刃部は刃先に向かってやや広がり、刃先は鈍い両刃でやや外湾する。上刃端には緩い突縁が基部上部まで伸びている。この形態はドゥシャイエのA型に相当し、バニ・サルマー（Bani Surmar）、テペ・ギヤンIV層（Tepe Giyan）、ウル（Ur）のPG457号墓から

出土している（Vanden Berghe 1968: 109; Moorey 1971: 41; Zettler and Horne 1998: 170）。モレイはこの形態の斧を前3千年紀第3四半期に年代付けている（Moorey 1971: 41）。彼が紹介したアッシュモレアン博物館資料にもこの形態が含まれている（Moorey 1971: Fig. 3-4, 5）が、本資料のように刃部上面から基部上部に走る突縁は存在しない。カールメイヤーはこの種の斧を前3千年紀半ばに位置づけている（Calmeyer 1969: 203）。また、ウルのスタンダードにこの形態の斧を持つ人物が表現されている。これらのことから、この種の斧は前3千年紀半ばから後半に使用されたと考えられる。

図3-2は基部背面に2つのキノコ状突起を有し、基部中位に刻み隆帯が斜めに巡っている。その他の形態は図3-1に酷似している。このような形態の類例は発見できなかつたが、やや大型で突起の数が多いものは見出すことができる。ドゥシャイエが紹介している資料（Deshayes 1960: Pl. XIX-12）は管状柄孔が長く、キノコ状突起も13個付けられている。ワウルが写真で紹介している資料（Waele 1982: Fig. 5）も管状柄孔が長く、キノコ状突起は7個付けられる。ワウルはこの資料がルリストーンから得られたものであり、その年代は前3千年紀末としている。ドュソが紹介したルリストーン出土とされる資料も突起が7個付け

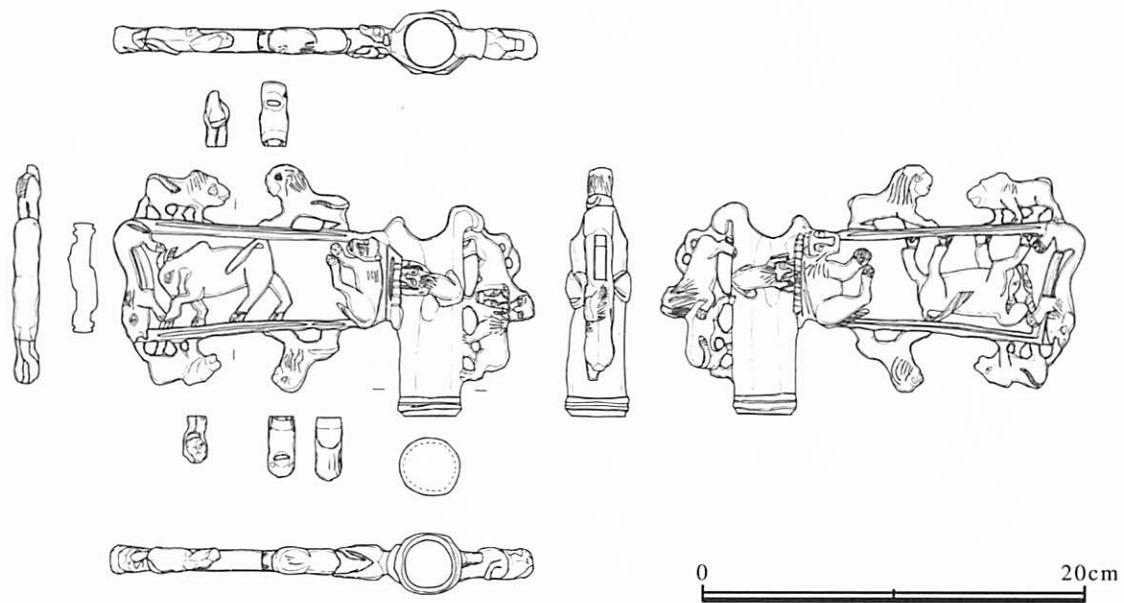


図4 中近東文化センターの青銅製斧

られている（図6-1）。図3-2は図3-1とワウル資料やドュソ資料（図6-1）の中間的な形態であり、時期は前3千年紀後半と考えられよう。

図3-3は管状柄孔の無い銘文付きの斧である。基部の背面は先端が丸みを帯びた三角形状を呈し、基部の上下端には柄孔に沿って抉りが存在する。ドゥシャイエ分類ではB型に相当する。この資料は中近東文化センターに所蔵される以前に既に報告されている（Dossin 1962: 156）。銘文は〔Su-dur-ul, da-num, LUGAL, A-ka-de^{ki}〕と記されており、「シュドゥルル、強き者、王、アッカドの」と訳される（足立編 2001: 48）。シュドゥルルはアッカド終末期の王であり、前22世紀頃に位置づけられる。

図3-3の類似資料をワウルが紹介している（Waele 1982: Fig. 2）。基部上下端の括れがやや発達しており、刃部の長さが短いがほぼ同一の形態を有する。ワウルはこの資料の年代を前3千年紀末としている。マスカレラも類似の紹介している（図6-2）（Muscarella 1988: 386）が、刃部と基部の境が何らかの生物の頭部を呈しており、その口から刃部が飛び出すように作られている。刃部根元の生物の頭部表現がどの地域で生まれたのかは不明であるとした。

またマスカレラは既にドュソが指摘していた（Dussaud 1930: 248）通り、アッカドのナラムシン王の戦勝碑にこの形態の斧が見られることから、この種の斧を「ナラムシン斧（Naramsin axe）」と呼び、テペ・ガウラVI層からこの形態の斧が出土していることなどから、前3千年紀後半に年代付けた（Muscarella 1988: 386）。

図3-4も管状柄孔が存在しない形態の斧である。図3-3と同じくドゥシャイエのB型に相当する。基部の上下端

に抉りがあり、その抉りから渦巻き状の突起が伸び、基部背面には鉤状の突起が付けられている。この斧の特徴は柄孔の断面形が楕円形であることで、このような形態の柄孔を持つ斧は比較的珍しい。

モレイが紹介しているこの種の斧の柄孔もやはり楕円形である（Moorey 1971: Fig. 5: 12）。モレイの資料は渦巻き状突起の渦がやや緩い。キシュの古バビロニア期からこの形態の斧が出土していることから、モレイはこの種の斧に前2千年紀前半の年代を与えており（Moorey 1971: 47）。アミエもこの種の斧を紹介しており（図6-3）（Amiet 1976: Pl. 24）、モレイと同様に前2千年紀初に位置づけている。刃部根元にライオン頭部の装飾があり、その口から刃部を吐き出している。生物は特定出来なかったが、図6-2もこの吐き出し状の刃部を有していた。

図3-5も管状柄孔のない斧であり、半円形を呈する。刃部と基部の間には2つの窓が設けられている。刃部と基部は中央の軸によってつながり、上下は接してはいるが連結していない。基部背面にはボタン状の突起が付けられている。ドゥシャイエ分類ではM型である。これまで紹介してきた資料とは異なる形態を呈しており、別の系統関係によってその出自が説明される。

モレイはこの種の斧を窓付斧（Fenestrated axe）として紹介し（Moorey 1971: Fig. 8: 24）、イプシロン形斧（Epsilon axe）（図6-4）から変化したと示唆した（Moorey 1971: 57）。イプシロン形斧とは形状がギリシア文字のイプシロン（ε）に似ているため付けられた名称であろう。イプシロン形斧は基部に設けられた三つの小孔に鍔留めすることによって柄と連結されており、柄孔付斧で

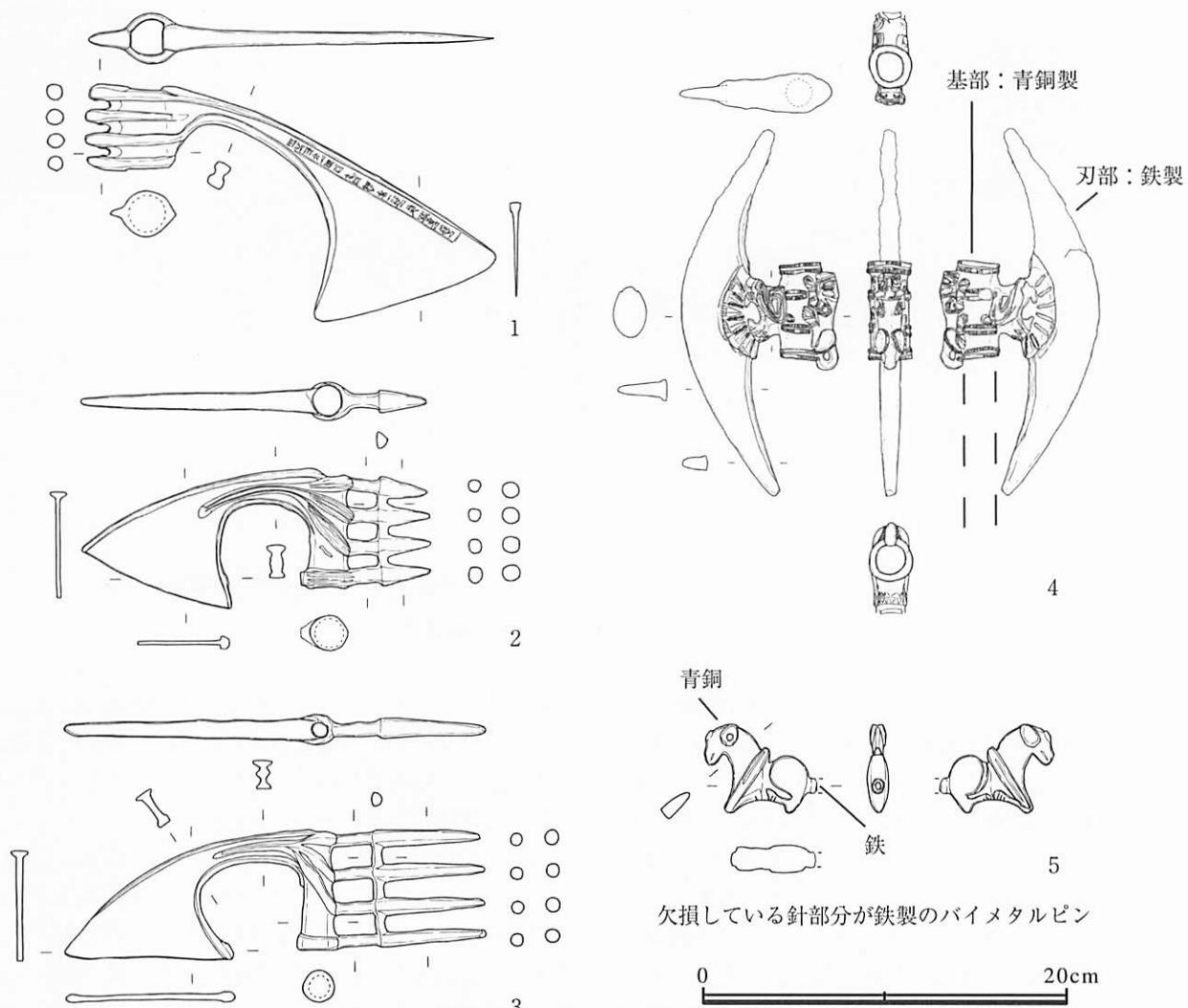


図5 中近東文化センターの青銅製斧とバイメタル製ピン

はない。モレイは、図3-5のタイプの斧はエジプト、シリア、メソポタミア、イラン、アルメニアといった広範囲に分布するとし、前19～18世紀頃に年代付けている(Moorey 1971: 57-58)。モレイとは異なり、マスカレラは図3-5のタイプの斧を碇形斧(Anchor axe)と呼んでいる。ただ、この形態がイブシロン形斧に由来することはモレイと同意見である。

マスカレラは基部背面の突起と2つある窓に紐を巡らし結びつけ、柄と斧身の連結を強化させたと示唆した。また碇形斧を前3千年紀の第4四半期に年代づけ、シリアにその起源があることを仄めかしている(Muscarella 1988: 385)。またモレイとマスカレラは碇形斧がイランのギーラーン州から盗掘によって多量に出土していることを紹介している。この形態の斧の年代はモレイとマスカレラの年代観を合わせて、前3千年紀末～前2千年紀初め頃と考えておきたい。

図3-6も管状柄孔の無い形状である。刃面から基部にかけ

けて2つの半円形の窓が設けられていることは図3-6に類似するが、基部と刃部は中央、上下の3ヵ所で連結し、刃部はかなり肉厚である。この形態をマスカレラは窓付斧と呼び、碇形斧と区別している。

以下に彼の窓付斧の分析を紹介する。碇形斧、窓付斧とも刃面に窓が2面設けられることは共通しているが、碇形は刃部と基部とが中央部でしか連結しておらず、完全な窓にはなっていない。マスカレラはイブシロン形斧、碇形斧、窓付斧の順に変化していくという系統関係を提示している。

図3-6は窓付斧の中でもカモノハシ形斧("Duckbill" axe)と呼ばれるタイプで、これに先行する形態が眼形斧("Eye" axe)であり(図6-5)、後者の方が、碇形斧に形態が類似する。つまり窓付斧を眼形斧とカモノハシ形斧に分けている。カモノハシ形斧は主にシリア、パレスティナ、アナトリアに分布しており、メソポタミアには少ないと指摘されている。エブラ(Ebra)で出土が確認されている

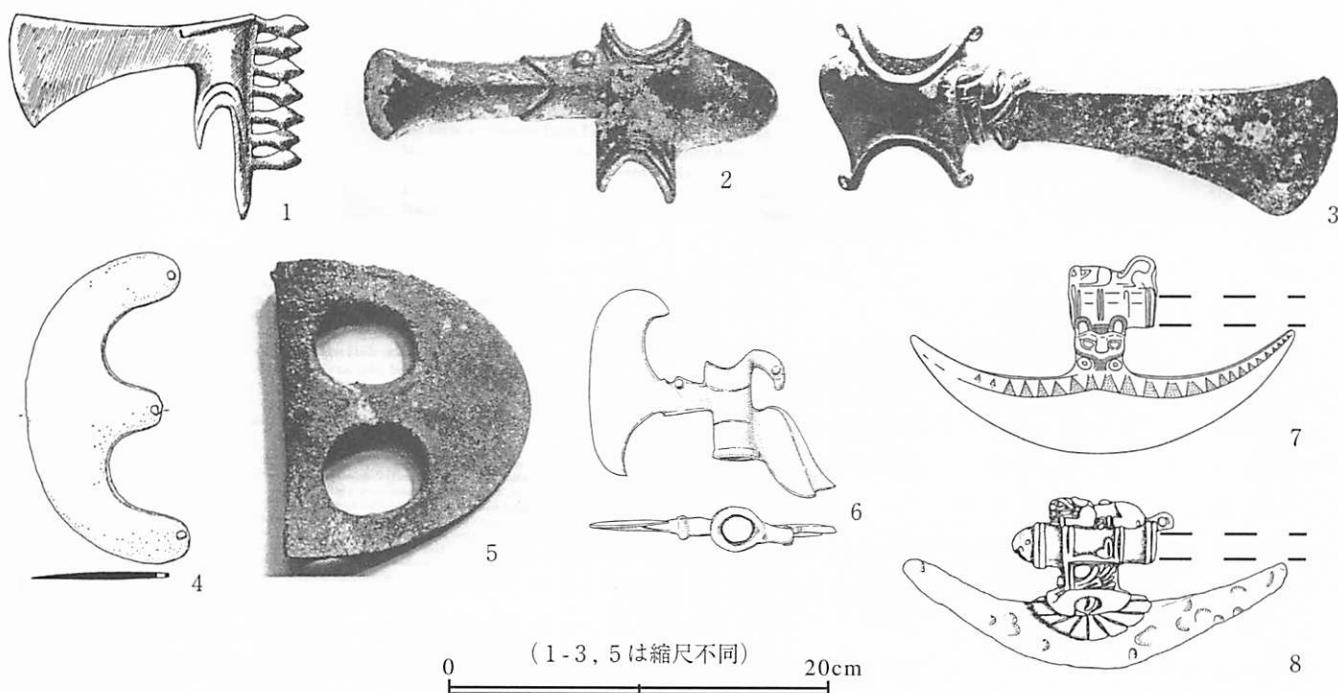


図6 青銅製斧比較資料 (1, Dussaud 1930: fig. 7; 2, Mascarella 1988: No. 512; 3, Amiet 1976: No. 24; 4, Moorey 1976: Fig. 8-22; 5, Mascarella 1988: No. 510; 6, Mooret 1976: Fig. 4-11; 7, Calmeyer 1969: Abb. 73; 8, de Waele 1982: Fig. 20)

が、発掘調査による所見は少ない。またカモノハシ形斧のイランでの発見例（盗掘等も含めて）は報告されていない。眼形斧はスーサ（Susa）で出土している。

マスカレラは眼形斧の時期を前2千年紀の初め約200年間とし、カモノハシ形斧はそれと同時代からやや遅れると考えている（Mascarella 1988: 385-387）。

以上、マスカレラの考え方を紹介した。モレイとの間に用語上の相違があるが、本稿ではより詳細に分析しているマスカレラの用語（碇型斧、眼形斧、カモノハシ形）を使用し、イブシロン形斧を加えた半円形の刃部を持ち、窓に刃面を有する形態の一群を「窓付斧系」と考えておきたい。

図4は多数のライオン、ヤギの装飾が施される斧である。刃面両面にライオン、ヤギが1頭づつ、刃先には頭を下にしたライオンが1頭、このライオンは刃部下端に付けられたライオンの後ろ足に噛みついている。刃部上下端には2頭ずつライオンが向き合っており、後方のライオンにはたてがみが表現されていることから、雄ライオンと思われる。基部両側面中央には上方から見たライオンが表現されている。このライオンは刃部の縁辺を囲む棹状の飾りに噛みついているようだ。基部背面にはヤギの頸部に噛みつくライオンが表現されている。

このような8頭のライオン、3頭のヤギの装飾を有する類例は発掘調査報告やコレクション図録などから見出すことができない。動物像の装飾を施すことは、前3千年紀後

半から認められ、イラン南西部の特徴と考えられている（Moorey 1971: 45）。この斧の年代については比較資料が少ないと認められ、今後の課題としたい。

図5-1～3は鉈付斧（Spike-butted axe）である。図5-1は鉈の発達が弱く、管状柄孔の存在しない形態であり、銘文を有する。銘文は〔ša šarru tiš šu ut ru uk DINGIR nah hu un te〕であり、「（これは）王シュトルクナッファンテのもの」と記されている（小野寺 1980; 紺谷他編 2002: 30）。シュトルクナッファンテ（在位：前1207-1117年頃）はエラム中王国の王であり、カッシートと争い、バビロンを攻めてハンムラビ法典をスーサへ持ち帰ったことで有名である。同様な形態でやはり銘文を持つ資料がアミエによって2例紹介されている（Amiet 1976: Fig. 25, 26）。1点は前12世紀頃のエラム中王国の王シルハク・インシュシナク（Shilhak-Inshushinak）であり、もう1点はエラム中王国を攻めて、マルドゥク神像などを奪還したネブガドネツァル1世（Nebuchadnezzar I）である。このように図5-1に類似する形態で銘文を有する資料はその銘文から前12～10世紀に年代付けられる。

図5-1に類似する資料はルリストーンのバルディ・バル（Bard-i Bal）（Vanden Berghe 1971）、クタリ・グルグル（Kutal-i Gulgel）（Vanden Berghe 1973）で出土している。両遺跡とも報告者によって前2千年紀末頃に位置付けられている。これらは半円形突縁付柄短剣（Lappet flanged

dagger) と併存している。筆者はこの種の短剣の年代を前2千年紀の第4四半期頃と分析したことがある(Adachi 2002: 35)。のことからも図5-1の年代は前2千年紀末頃で問題なかろう。

図5-2、3は鉄付斧の中でも鉄が発達している形態である。また管状柄孔が存在することでも形態的に異なる。図5-1は刃先が柄の方向に対して斜めであり、図5-3は刃先が柄の方向に対して垂直方向になっており、道具としても武器としてもその機能に疑問がもたれる。また刃先は全く研がれていない。図5-1の刃先が鋭利に研がれていることと対称的である。

鉄付斧の中で、管状柄孔が無く、鉄が発達していない形態をI類(図5-1)、管状柄孔があり、鉄が発達しているものをII類(図5-2,3)と分類しておきたい。II類の調査例は発見できなかったが、その形態が利器としての機能を果たせない構造に変化しており、I類より遅れるものと考えられる。

図5-4は管状柄孔は無く、刃部は三日月形を呈する。刃部は鉄製、基部は青銅製のバイメタル製品である。この三日月形斧(Crescentic axe)は仏語ではハ(ア)ルバード(Hallebarde)と表現される。本資料の基部背面にはライオンが表現されており、刃部根元から基部にかけてはライオンの横顔が表現されている。三日月形斧はバイメタル製であることがしばしば報告されている(Moorey 1971: 51; Aimet 1976: Pl. 57; Waele 1982: 30-33)。

ワウルは4点の資料を紹介して三日月形斧を分析している(Waele 1988: Fig. 17-20)。そのうち3点は青銅製であり、それらは前9~7世紀に年代付けられ、1点のバイメタル製品(図6-7)は前8~7世紀としている。このバイメタル製品は中近東文化センター資料と酷似しており、アミエの紹介するバイメタル製品も刃部は欠損しているものの良く似ている。バイメタル製品は刃部根元にライオンの横顔が表現されるという特徴があるようだ。

青銅製斧の編年試案(前3~1千年紀)

前節では中近東文化センター資料の年代について先行研究による類似資料を整理した。ここでは、具体的な年代付けを行いながら、その系統関係を分析する。中近東文化センター資料以外の比較資料を組み込みながら、青銅製斧の前3~1千年紀の編年試案を作成した(図7)。

3-1の資料は、初期王朝時代のウルの資料と比較でき、前3千年紀中頃に位置づけられる。その後、この形態の基部背面には様々な装飾が施されるようになる。3-2は基部背面にきのこ状の突起を有しており、3-1よりやや遅れる。これらは独立した管状柄孔を有しており「管状斧系」と呼んで区別する。この系統の斧は柄孔を有する青銅斧の系統

としては最も古いものである。

管状柄孔の存在しない斧は前3千年紀後半には登場しており、3-3は銘文から前22世紀に位置づけられる。管状柄孔のない斧は基部上下端に抉りがあることが特徴であり、6-2のように基部上下端の抉りが発達するタイプや、3-4、6-3のような抉りの先端部に渦巻き状の突起を有するタイプが登場する。これらを「抉入斧系」として管状斧系と区別する。

鉄付斧の起源についてモレイはベトシャン(Bethshan)やラス・シャムラ(Ras Shamra)の資料からシリア起源の可能性を示唆している(Moorey 1971: 49)。しかし、3-2の資料のように、基部背面の突起は前3千年紀中頃のウル出土資料と系統関係がある斧(3-2)に存在している。基部背面の装飾の一つとしてのキノコ状突起が次第に鋭い鉄状に変化していくと考えられる。キノコ状の突起は管状斧系の装飾の一つとして、シリアからイランまでの広範囲において好まれたのだろう。鉄付斧I類の鉄装飾もキノコ状の形状であり、鉄付斧系は管状斧系に由来すると考えられる。

前2千年紀に入ると刃部が三日月形状に大型化する資料が登場してくる(6-6)(Moorey 1976: 46)。G.ドシン(Dossin)はバビロン第1王朝時代にスーサを支配したアダパクシュ(Addapakšu)の銘文が施されている資料を報告している(Dossin 1962: 156-7)。この資料に対しては、最近D.T.ポッツ(Potts)が考察を加えている。彼は王銘をアダパクシュではなくアッタ=フシュ(Atta-hushu)と読む説を探っており、この形態の斧をアッタ=フシュ型斧(Atta-hushu type axe)と呼び、前2千年紀前半の年代を与えている(Potts 1999: 177)。

またチョガ・ザンビル(Choga Zanbil)のキリリシャ(Kiririsha)神殿では数点の青銅製斧が出土しており、このうちの1点がこの三日月形斧である。そして、この出土斧のうち2点が管状斧系資料であり、エラム中王国の王ウンタシュ・ナピリシャ(Untash Napirisha)(在位:前1260-1235年)の銘文が施されている(Ghirshman 1966: Pl. LXXXIII)。

上記のことから、この種の斧の年代は前18~13世紀頃と考えられよう。このタイプを三日月形斧I類として三日月形斧系という系統を提示する。

この三日月形斧系のもう1種類のグループとして、中近東文化センター資料の5-4が挙げられる。このタイプは刃先が長くなり全体的に細長く、基部は比較的小型であるが、丁寧な装飾が施されている。これを三日月形斧II類として区別する。この類型には、刃部が鉄製で基部が青銅製のバイメタル製品が存在し、その場合は刃部の付け根にライオンの横顔が表現されることが多い。全体が青銅製の資料も

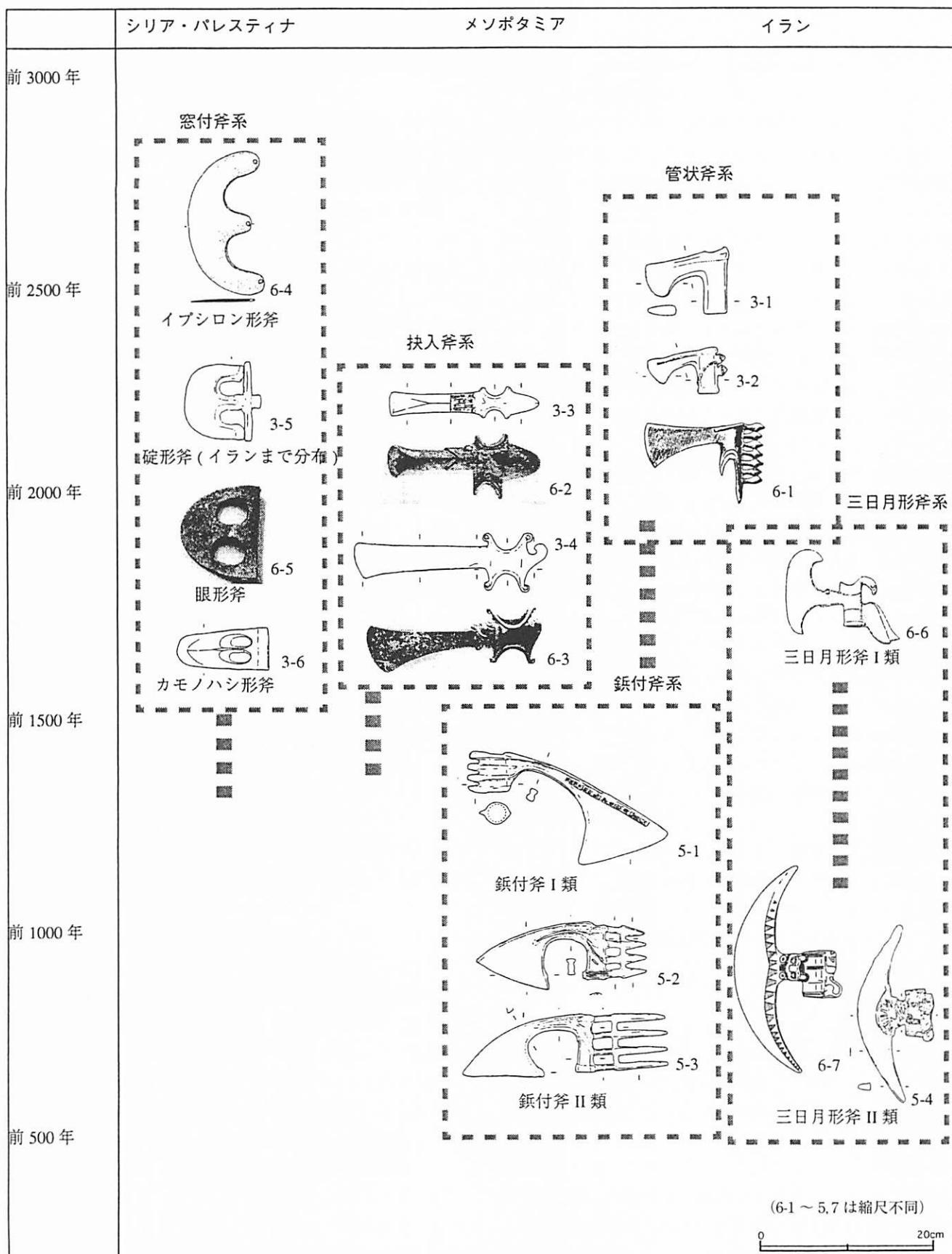


図7 青銅器斧編年試案

存在し(6-7)、その場合は刃部付け根にはライオンの顔が正面から描かれことが多いようだ。このような表現はライオン・マスク(Lion Mask)と呼ばれ、前8～7世紀に特徴的な装飾様式である(Moorey 1971: 42)。

三日月形I類には管状柄孔が存在することから、この類型は管状斧系に由来すると考えられる。管状斧系には様々な形態が混在しており、この系統の斧の細別はさらに必要である。

最後に挙げる系統として窓付斧系が存在する。これは前節でも紹介したようにモレイやマスカレラによって整理されている。柄孔付斧ではなく、鋸留め装着タイプのイプシリオン形斧に始まり、柄孔付斧である碇形斧へ変化し、その後、眼形斧、カモノハシ形斧へと移り変わっていく。その分布はシリア・パレスティナにその中心にあるが、碇形斧はギーラーン州で多数出土することが知られている。

青銅製斧編年試案と古代イランの前3～1千年紀の様相

古代西アジアの青銅製斧の研究を概観した後、中近東文化センター資料の年代付けを行い、その結果から新たな系統関係を提示した。本稿の研究は新たな発掘資料の分析によるものではなく、現在までの研究成果の枠組みに中近東文化センター資料を配置する作業を基本としている。

斧の研究にとって最大の問題点は発掘資料が少ないことである。資料の大部分は古美術品として博物館や個人が購入したものであり、時期や地域を特定することが困難である。時期を推定するためには銘文や図像資料に頼らざる得ないが、限られた資料しか活用できない。そのため前節では型式学的な系統関係を探ることによって、編年試案を提示した(図7)。

この試案の先行研究との違いは5つの系統を提示したことであり、ある程度の型式的な枠組みで個別に検討されてきた斧資料研究をまとめなおしたものであるが、先行研究と異なる見解が含まれている。それらの相違点を明確にした上で、本研究から古代イランの前3～1千年紀の様相に考察を加える。

前3千年紀前半には柄孔付斧としては管状斧系が成立する。同型の斧がウル王墓出土のスタンダードに描かれた戦いを表す場面に登場しており、武器として使用されていたことが窺える。前3千年紀後半になると、新たに抉入斧系と窓付斧系が加わる。この時期に「柄孔」という構造を作り出す鋳造技術が確立されたと考えられる。管状斧系と抉入斧系はメソポタミアがその起源地であるが、窓付斧系はシリア・パレスティナが起源地である。抉入斧系はナラムシンの戦勝碑に描かれていることから、「ナラムシン斧」とも呼ばれ、武器としての機能が考えられる。以上の前3千年紀の様相は先行研究とほぼ一致している。

本稿で注目したのは管状斧系に認められる基部背面のキノコ状突起である(3-2, 6-1)。このような装飾を有する資料の層位的な発掘資料は知られておらず、銘文資料も存在しないので、年代を決定するのは困難である。しかし、基部背面の突起は前2千年紀半ばから発生する鋸付斧系の特徴に類似しており、管状斧系から鋸付斧系への変遷を想定した。

鋸付斧系の起源については、モレイがシリア起源説を紹介しているが(Moorey 1971: 49)、鋸付斧の分布はイラン南西部に集中しており、前2千年紀半ばから登場することから、エラム王国との関係が深いと考えられよう。数少ないシリアの類例より、イランに近接するメソポタミアでの起源を考えたほうが妥当である判断した。しかし、モレイのシリア起源説は発掘資料を根拠にしており、この問題は個別に取りあげていかねばならない。

本稿では三日月形斧系を新たに提示した。管状柄孔を有し刃部はやや不整の三日月形となる形態をI類(6-6)、刃部が均整の取れた三日月形を呈し、非常に短い管状柄孔が基部となる形態をII類とした(6-7, 5-4)。この2つの類型の系統関係はこれまで論じられていないが、大型の三日月形刃部を有すること、両類型が南西イランを中心に分布することから、この系統を提示した。

前2千年紀に入ると、管状斧系から鋸付斧系と三日月形斧系が発生したとするのが本稿編年試案で強調したい点である。その分布が南西イランに偏ることからエラムとの関係が考えられよう。鋸付斧系と三日月形斧系はイランで主流となる形態であり、メソポタミアで主流であった管状斧系や抉入斧系と比べて刃部が大型化していることに特徴がある。この大型化が管状斧系や抉入斧系が持っていた武器としての機能を高める変化であったのか、それとも別の機能が考えられるかを最後に論じ、本稿のまとめとしたい。

まとめ(古代イラン青銅製斧の最終形態)

中近東文化センター資料の年代付けを行いながら、青銅製斧の編年試案を検討した結果、管状斧系、抉入斧系、鋸付斧系、三日月形斧系、窓付斧系の5系統が存在することを提示した。このうち、管状斧系と鋸付斧系、管状斧系と三日月形斧系にはつながりがあると考えるので、これを整理すると以下の4つの系統にまとめられる。

1. 管状斧系→鋸付斧系
2. 管状斧系→三日月形斧系
3. 抉入斧系
4. 窓付斧系

現在のところ、これらの系統全てがイランで誕生したという証拠はなく、1～3の系統はメソポタミア、4はシリア・パレスティナからイランへ導入された技術と考えられ

る。しかしこれらの青銅製斧は窓付斧系を除いて、成立してからすぐにイランへもたらされ、突起装飾、動物装飾(特にライオン)、渦巻き装飾などが付加された。最終的な類型として、鉈付斧II類と三日月形斧II類が挙げられるが、鉈付斧II類は前述したように利器として使用するには不自然な方向に刃先が向いている。

三日月形斧II類は柄を装着すると柄と刃部下端が近接することになる(図5-4, 図6-7, 8)⁶⁾。実際に利器として利用した場合、対象物に命中した衝撃が刃部下端から直接柄につたわり柄を破損させてしまうのではないかと思われる程、不自然な構造である。以上の点から、鉈付斧II類と三日月形斧II類の利器としての利用は困難であると考えられる。

編年試案図(図7)で示される通り、イランでは複数の系統において斧に装飾を施す伝統がある。同じ武器として利用された剣と比較するとその装飾性は極めて高いと言える。鉈付斧系と三日月形斧系は刃部が大型化するという変化で管状斧系から発生したという仮説を前節で提示したが、この大型化も武器としての機能より、装飾性を高めた結果であったかもしれない。

その強い装飾性の伝統は機能性を上回り、最終的には祭器としてのみ使用されるに至ったと推定する。鉈付斧II類や三日月形斧II類が製作されたのは前8世紀頃と考えられ、この時期は既に鉄器が利器として実用的に使用され始めており、青銅器は武器としての役目を終えてしまっていたであろう。この時期になると、衣類や頭髪を整えるための留め具にまで、鉄が素材として一部利用されている(図5-5)ことからも、鉄器利用の顕在化が窺える。

最近報告書が刊行されたチャマジ・ムマ(Chamahzi Mumah)やジュビ・ゴウハル(Djub-i Gauhar)は前8~7世紀頃の遺跡と考えられるが(Haerinck and Overlaet 1998, 1999; ハーリンク・ウヴェラート 2002: 88)、青銅製の鉈付斧II類や三日月形斧II類は出土していないが、鉄製の簡単な構造の柄孔付斧は比較的豊富に出土している。鉈付斧II類や三日月形斧II類といった青銅製斧と簡単な構造の鉄製斧には型式学的な系統関係を認めることができない。

本稿では青銅製斧の最終的な類型が祭器として利用された仮説を提示した。それと同時期の鉄製斧は、実用的で簡素な形状を呈しており、鉄器への移行と共にイランにおける斧への強い装飾性は喪失していったと考えられよう。今後は鉄製斧の形態変化を分析することが課題となる。

また本稿で提唱した青銅斧の系統の中で、「管状斧系」としたものは、さらに細分が可能である。これを分析することも大きな課題である。

中近東文化センター資料の実測には片山裕介氏(國學院大學大学院生)の協力を得た。紺谷亮一(岡山市立オリエント美術館学芸員)、大津忠彦(中近東文化センター研究員)、岡野智彦(同研究員)氏には資料観察の機会と助言を受けた。ここに感謝の意を表します。本稿は日本科学協会の笹川科学研究助成による研究成果の一部である。

註

- 1) 佐原真はこの形態を縦横兼用斧と呼んでいる(佐原 1994)。
- 2) Axe-head の訳語として「斧頭」という用語も考えられるが、本稿の「基部」を「頭部」と表現する場合もあり、混同しないため、「斧頭」「頭部」という表現は使用せず、それぞれ「斧身」「基部」と表現する。「柄孔付斧(Shaft-hole axe)」に対しては「有孔斧」という用語が存在するが、訳語として前者を採用した。
- 3) 一部を佐原の表現方法(佐原 1994: 8)を参考とした。基部、刃面などである。
- 4) 図3の引用はいずれも Deshayes 1960 であり、それぞれ A型: Pl. XX-20; B型: Pl. XX-14; C型: Pl. XX-12; D型: Pl. XXI-5; E型: Pl. XXIII-9; F型: Pl. XXII-11; G型: Pl. XXII-18; H型: Pl. XXII-9; I型: Pl. XXV-16; J型: XXVI-9; K型: Pl. XVIII-2; L型: XXVIII-3; M型: Pl. XXVIII-9; N型: Pl. XXIX-3; O型: Pl. XXIX-10 である。
- 5) カールメイヤーのグループ2、3、14、15、21、60、65がドゥシャヤイエ分類のA型に相当し、11、20、63はB型、13はM型、19はC型、22は本稿の眼形斧、23、72は三日月形斧I類、33、62はD型、34は三日月形斧II類である。
- 6) 2002年に岡山市立オリエント美術館で行われた「古代イラン秘宝展」(紺谷亮一監修)では柄を実際に挿入した斧が展示された。本稿の執筆に際し、この展示から重要な示唆を受けた。

引用・参考文献

- Adachi, T. 2002 The Development of the 'Ear' Pommel Sword in Northwestern Iran. *Bulletin of the Okayama Orient Museum* 19: 23-37.
- Amiet, P. 1976 *Les antiquités du Luristan*. Paris, Diffusion du Boccard.
- Calmeyer, P. 1969 *Datierbare Bronzen aus Luristan und Kirmanshar*. Berlin, Walter de Gruyter & Co.
- Deshayes, J. 1960 *Les outils de bronze, de l'Indus au Danube*. Paris, Librairie orientaliste paul geuthner.
- Dossin, G. 1962 Bronzes Inscrits du Luristan de la Collection Foroughi. *Iranica Antiqua* 2: 149-164.
- Dussaud, R. 1930 Haches à douille de type asiatique. *Syria* 11: 245-271.
- Ghirshman, R. 1966 *Tchoga Zanbil (Dur-Untash) vol.I: la ziggurat*. Paris, Librairie orientaliste paul geuthner.
- Haerinck, E. and B. Overlaet 1998 *Chamahzi Mumah: an Iron Age III Graveyard*. Lovani, Peeters.
- Haerinck, E. and B. Overlaet 1999 *Djub-i Gauhar and Gul Khanan Murdah: Iron Age III Graveyards in the Avian Plain*. Lovani, Peeters.
- Kontani, R. 2002 Restoring the Bronze Swords with Iron Cores in Northwestern Iran: an Inquiry into Bimetal Technique. *Bulletin of the Okayama Orient Museum* 19: 39-50.
- Medvedskaya, I. N. 1982 *Iran: Iron Age I*. Oxford, BAR.
- Moorey, P. R. S. 1971 *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum*. Oxford, the Clarendon Press
- Muscarella, O. W. 1988 *Bronze and Iron: Ancient Near Eastern Artifacts in the Metropolitan Museum of Art*. New York, the Metropolitan Museum of Art.
- Potts, D.T. 1999 *The Archaeology of Elam: Formation and Transformation of an Ancient Iranian State*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Vanden Berghe, L. 1968 From Bani Surmah to War Kabud: Bronzes of the

- Shepherds and Horsemen of Luristan. *Archaeolocia Viva* 1: 102-123.
- Vanden Berghe, L. 1971 Excavations in Pusht-i Kuh (Iran) Tombs Provide Evidence on Dating "Typical Luristan Bronzes". *Archaeology* 24-3: 263-271.
- Vanden Berghe, L. 1973 Le Luristan a l'age du Fer: la necropole de Katal-i Gulgul. *Archeologia* 3: 16-29.
- de Waele, É. 1982 *Bronzes du Luristan et d'Amlash: Ancienne collection Godard*. Louvain-la-Neuve, Institut supérieur d'archéologie et d'histoire de l'art.
- Zettler, L. and Horne, L. (eds.) 1998 *Treasures from the Royal Tombs of Ur*. Philadelphia, University of Pennsylvania Museum.
- 足立拓朗 (編) 2001『旧約聖書時代の国々－歴史と文化の多様性－』中近東文化センター。
- 大津忠彦 1999「古代イランの金属器」近藤英夫 (編)『古代オリエントにおける都市形成とその展開』東海大学文学部考古学研究室 57-65 頁。
- 小野寺幸也 1980「出光美術館所蔵「ルリストン」青銅斧の刻文について」『出光美術館館報』第30号 13-18 頁。
- 紺谷亮一 2001「古代イランの青銅劍再考－岡山市立オリエント美術館所蔵・バイメタル劍－」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』Vol. 18 21-30 頁。
- 紺谷亮一・足立拓朗・大津忠彦 (編) 2002『古代イラン秘宝展－山岳に華開いた金属器文化－』岡山市立オリエント美術館。
- 佐原 真 1994『斧の文化史』UP 考古学選書 6 東京大学出版会。
- E. ハーリング・B. ウヴェラート 2002「「ルリストン」問題再考－Pusht-i Kuh (ルリストン) におけるベルギー調査団の考古学調査成果より－」紺谷他 (編) 76-89 頁。
- 山本忠尚 1982「西北イラン出土の青銅製短剣について－ルリストン青銅器の一侧面－」『考古学論考』平凡社 1087-1115 頁。
- 山本忠尚 1990「ルリストン青銅器研究の現状」天理大学・天理教道友社 (編)『ひとのこころ 天理大学附属天理参考館所蔵』第3期第2巻 天理教道友社 162-166 頁。

足立拓朗
中近東文化センター
Takuro ADACHI
The Middle Eastern Culture Center in Japan